

内山節とのあい

渡植彦太郎が念願だった私家版の著書をだしたのは、昭和五十八年一月一日である。

李杜鉉に出版を約束してから、はや二年の月日が流れてしまっていたが、それには二つの理由があった。

渡植は資本制商品経済以前の社会と資本制商品経済社会の違いを、人間の本来的な存在の仕方という次元から解明しようと試み、そのためになお三つの論文を書く必要があった。渡植は李杜鉉を港へ見送った春から執筆に取りかかり、その年の十月にやっと論文を完成させた。

その要旨はつぎのようなことであった。

本来、人間は「使用価値」をつくる能力としての「技能知」をもっているが、資本制商品社会では「技能知」が失われ、労働者は科学技術のもとで働くようになる。もともと「技能知」は生活集団のなかで生まれ育まれていくものだが、科学技術に代表される「技術知」は仕事集団のなかで、人間の生活とは分離された場所で作られだされる。

資本制以前の社会では、商品は数量化できない質的な価値である「使用価値」をもち、消費者は生産者からこの「使用価値」を受け取って、生活のなかで生かしていた。

しかし、近代経済機構は貨幣を介することで経済行為の対象をすべて数量化し、さらには近代経済機構と科学技術のドッキングを可能にした。だから資本制商品社会においては、質よりも量が評価される。

人間性よりも生産性が優先され、生活よりも仕事、環境よりも開発に価値がおかれる。そして、消費者は本当に自分たちの暮らしを豊かにするものは何か、ということに気づきにくくなる。社会がそのような仕組みをもつようになったからである。

約言すれば、渡植は書き加えた三つの論文の中で、使用価値を崩壊させていく資本制商品社会の問題を、人間らしく生きるための土台をなす生活文化の崩壊という視座からとらえていこうとしたのであった。

本にする原稿が完成し、印刷所を探していたところ、福井師範学校時代の教え子の木水育男が一切を自分にやらせて欲しいとやってきた。

木水は美術教師で、児童美術教育の世界では国内でも指導的な立場にあり、



木水 育男

東京の銀座のビルに「児童美術研究所」を開設していたこともある美術教育の実践家だった。

また、木水は前衛の洋画家 ^{えいきゅう} 瑛九 の有力な支援者としても名が知られていた。

木水と瑛九の交友は昭和二十八年から瑛九が死去する昭和三十五年までつづき、この七年間で木水が瑛九から受け取った手紙は九十六通、木水が福井で組織した「瑛九・友の会」が買い取ったリトグラフは百四十九点に達していた。

その木水がいうのなら、と渡植は本造りを依頼した。

木水は自分の住む鯖江のよく知った印刷所へ原稿をもちこんだ。小さな家内工業の印刷所だから、手作業も同然で時間がかかる。本の内容からしてそうした職人芸がいかせる製本の方がよいだろう、という木水の考えに渡植も異論はなかった。

この印刷所で、和紙にタイプ印刷、A 五判の上製本を二百二十部ほど印刷した。発行までにほぼ一年を要している。厚さは三百四十六頁。書名は『使用価値の社会学』とした。もちろん非売品である。一部五千円をこえる費用がかかった。総額は百万円をこえたが、その大半は木水が世話人となって集めた教え子たちからの賛助金で賄われている。

渡植は二十部余りを手元におき、残りを知友や教え子へ贈った。非常勤で勤めている大学の図書館にも納めた。

新年になってしばらくすると、著書を贈ったそのお礼や挨拶状、感想や批評を書きつづった葉書や手紙が老学者のもとへとどくようになった。内容は総じて儀礼的なものである。そして共通していることは、八十三歳という著者の高齢への驚嘆と敬服だった。著書の内容そのものについて賛同や支持を述べるものはまれであった。

久しぶりに電話をかけてくる者もいた。

先生のお元気なお声をお聞きして、わたしも勇気づけられました。電話の向こうで、教え子や知人は必ずそういった。渡植はそれでも十分うれしかった。

余生を四国の田舎で、学問をまるで畑を耕すがごとくに愉しんできた老学者の、やたらまわりくどい文章を読み、著者と共に経済や社会を再考してみようという人物は教え子のなかでさえ多くはない。

みんなそれぞれの生活にいそがしく、またかれらが歩んできた人生に即した独自の考えをもつようになっている。そうしたかれらに、小説や詩、あるいは陶器や絵画などの芸術作品ならまだしも、現役の学生でも閉口しそうな哲学や経済学の用語が並ぶ文章を味読させ、感想を求めるのは土台無理なことである。そのことは渡植もよく承知していた。だからなんであれ、返信があるだけで老学者は満足であった。

もちろん新聞や学術雑誌等に紹介され、書評が載れば、これにこしたことはない。だがそのようなことは望むべくもなかった。

私家版の著書発行にまつわるいささかの反響も途絶えがちになったそんなある日、一月十八日のことである。

朝日新聞の「読書」欄を読んでいた渡植に興味をひく書評があった。

評者は中岡哲郎で、「労働に関する本が、こんなにたくさん出版されているのかという驚きに近い感想がある」と前置きした上で、つぎのように書いていた。

「戦後ひとびとの思想と行動に暗黙のうちに枠組みを与えていた、歴史の発展、世界の行方、日本の進路、ひいては人間の解放についての思想体系が、あらゆる意味で現代をとらえきれないことが明瞭になって来ていて、しかし、それに代わって未来を方向づける大思想は現われないうちに、人びとは自分と社会をつなぐ最も日常的な原点である労働にかえって、そこから社会だとか世界だとか、歴史だとかを再構成する情熱にとらえられているのではないだろうか。そんなことを私に考えさせた本は、内山節の『労働の哲学』である。これはまことに興味ある本であって、ちょうどマルクスの『資本論』論理と世界を、徹底的に労働する側から解釈しなおそうという試みになっている。つまり労働する日常を起点に、世界史の展開を把握する大思想の構築を意図した、野心的な本なのである。(後略)」

渡植は中岡をその著作で知っていたが、内山節は初めて目にする名前だった。その内山が、「労働」を起点に思想を構築しようとしているという紹介に興味をわいた。



内山 節

これまで、「使用価値」を軸に資本制商品社会の問題を考えてきた渡植だが、あらためて、経済学の基本的な概念である労働と貨幣の関連を考察し、そこから使用価値についての考えを深めていくことが老学者の当面する課題であった。内山は「労働」をどのように考えているのであろうか。

渡植は大学の書籍部へ電話をいれた。

書籍部のなじみの女性が、さっそく内山節について調べてくれた。昭和二十五年生まれで、まだ三十歳そこそこである。老学者より五十一歳も年下だった。「経歴」には「哲学専攻」とだけあって、大学はでていないようだという。興味がわき、内山がこれまでだしている本が四冊あるというので、『労働の哲学』と一緒に注文した。書籍部では、この手の本は絶版になっている場合が多いが、図書館には入れてあるはずだと念をおした。

内山がだしている本の名をメモしながら、渡植は『山里の釣りから』という著書が妙に気になった。内山は二十六歳のとき、田畑書店から『労働過程論ノート』という本を初めてだし、それから四年後、一転して釣りの本である。釣りといっても、溪流釣りをとおしての自然や環境論であろうと渡植は察しがつ

いた。が、それにしても若くして不思議な哲学者がいたものである。

一日、そんな気持ちがぬけないことも手伝って渡植は夕方、兵庫教育大学の大学院で教育哲学を教えている武田正浩へ電話をし、朝日新聞の書評のことを伝えた。

武田とは渡植が松山に来た昭和四十四年の翌年、一年余り勤めていた今治の短期大学で知りあった同僚で、以来かれとは公私にわたる交際がつづいていた。中学校の教師から大学院の教授へと登りつめた武田は、勉強家で雑学を得意とし学問の世界しか知らない学者とは違った野人的な魅力の持ち主であった。武田はおもしろそうな本だからぜひ読んでみましょう、と応えた。